



自ら掴む経営エッセンス！

(記事：いどばた稲毛) 津隈成夫 過去記事も読めます⇒<http://idoina.com>

1/15 (火)

テーマ：『実践力』

出席18社19名
(美浜15、他会4、非会員0)

講師：教育業務部研究員 津隈 亮二 氏



Ryoji Tsuguma

よく通る声。そして明朗な気を全身から発散する津隈氏。

学んだら、実践目標を自分に課す

津隈氏は、宮崎県出身35歳。27歳の時に倫理研究所入所、5年間の富士研スタッフを経て、昨年4月より法人局に移る。5月11日には中西局長と共に、美浜で10分間の実践報告をしてくださいました。

北海道から鹿児島まで全国を出張する中、最も感じたことは、「やはり倫理は実践が一番大事」ということ。本や講話で勉強したことが、どれだけ自分に生かしているか、深く反省をした。

今では、学んだことの要点を手帳に書き、それを実践目標に落とし込んで、自分に課す。「成就の道と思い、頑張っています」と津隈氏は言う。

経営者自らの実践が、社員の心を揺さぶる

現在の日本では、いじめ・うつ病・離婚など、心の病が増えている。また家庭は今や、核家族ならぬ「ホテル家族」といわれ、食事の時間は家族ばらばら、誰がいつ出入りしてるかわからない状態だ。企業は賞味期限を偽る。これらの問題の原因はどこにあるか、津隈氏は「知識を知恵として消化することができなくなった結果」と指摘する。

学ぶばかりで、自分の内に入れることばかりをしていると、人は自分中心になり、「自分の今さえ良ければ、人なんて関係ない」と思うようになる。倫理も同じだ。学ぶばかりで実践がなければ、どんどん頑固になる。たとえば「明朗」の実践も、調子の悪い時にこそ、その人の真価が出るものだ。そして状況

に合わせて心が流れるのは、経営者としては致命傷だ。枝葉ばかりに囚われ、変えてはならぬものを見失ってしまうから、不祥事を起こしてしまうのだ。

そうならないために必要なのは、やはり実践だ。経営理念・社是・社訓を、具体的に実践(行動)に落とせているか。強い意志を持ち、経営者自ら社員に見本を示しているか。経営者自らの実践こそが、社員の心を揺さぶり、心の共有化を達成する。

「純情(すなお)」な心を高める3つの実践

純情な心とは、良心・正しい判断・直観を生み出す本(もと)となるものだ。「純情な心を高めるためには、次の3つの実践が必要」と津隈氏は提案する。

一. 初心・創業の精神を忘れず、これまで会社が存続してきた歴史を噛み締めること

バルサミコソースを作るイタリアの会社では、「歴史を噛み締めること」を社訓に掲げている。樽には、創業当時から変わらぬ刻印が押されており、社長は代々、その刻印を毎日触ってきた。そのため、樽の刻印の部分だけがテカテカ光っているという。

「パブロフの犬」の話もある。初心を忘れないために、歴史を噛み締めるために、毎日実践できることを行い、習慣化することが大切だ。

二. 社員・お客様の顔を忘れないこと

「こいつはこういう奴だ」と思った瞬間から、相手の欠点しか見えなくなる。だから好奇心を持つことが大事だ。挨拶した時には、アイコンタクトをとり、相手の心の状態を察知する。お客様や社員と心を1つにする。相手の心の状態というものは、経営者が日頃から自分で積み上げるものだ。それができれば、難しい話題も時を選ばずに、いつでも大切な情報が正しく伝わるだろう。

三. 利益を最優先しないこと

会社が発展するためには、確かに利益が必要だ。だが、会社存続の最重要条件ではない。最優先の判断基準ではない。利益よりも、「社会・会社・お客様・社員にとって、良い判断か？」を考えることだ。会社は自分が死んでも生きるもの。それには、自ら行動し、志を信念として固め、心を共有することが大切だ。

次回 第862回MS! 1/29 (火) 6時~7時+朝食会 ホテルニューオータニ幕張 (043-297-7777)

テーマ：『努力に勝るものなし』

講師：柏沼南 相談役 井畑 博海 氏

できるできるやればできる！
明るく楽しくなければ倫理じゃない！
・会員120社・MS30名以上・美浜を美しく